



UACJ (Thailand) Co., Ltd.への赴任経験から*

山本 大**

My Working Experience in UACJ (Thailand) Co., Ltd.*

Dai Yamamoto**

2015年秋、UACJ (Thailand) Co., Ltd. (以降、ラヨン製造所と省略)で本格的に熱間圧延ラインが立ち上がったのに伴い、自動車熱交換器用材料のタイ一貫生産立ち上げのためタイに赴任した。これまでタイはおろか東南アジアに旅行した経験すらなく、井の中の蛙であった私は、タイに対して古めかしいイメージしかなく、日本の田園風景のような風景が広がっているものと考えていた。しかし、実際に訪れたバンコクには、東京と遜色ないほどの数々の摩天楼がそびえたっており、数多くの日本車 (しかも新車) が渋滞をなし、人々は最新のスマートフォンでSNSに興じるなど、極めて現代的な都市であることに少し驚きを隠せなかった。また、高速道路を走れば随所に日本企業 (主に自動車やエアコン関係) の看板が見受けられ、街中の至る所で日本語を見かけ、日本文化が広く受け入れられている印象を感じた。

一方で、ラヨン製造所の存在するアマタシティ工業団地は、バンコクから南東に200 km程離れた、チョンブリ県とラヨン県の境界付近の自然豊かな場所にある。高速道路は舗装されているものの、一般道ではまだ舗装されていない凸凹道もあり、果物園や野菜畑の広がるローカルな地域である。ここには、主に東北地方出身の労働者が多く、ラヨン製造所も然りである。大卒以上のエンジニアについてはタイ全土から集まっており、その点は日本と変わらないように感じた。大卒人口は多いものの、大学院まで修了する人は日本ほど多くないようである。

海外で働く際には、お互いの文化に違いがあることを認識し、理解して受け入れることが重要であると思う。私自身、約2年間タイで働いた中で、当初は思い通りにいかず悩む機会も多かった。言語が違うのはもちろんのこと、仕事に対する考え方や思想 (タイは熱心



Fig. 1 Group photo with my colleagues in UATH.

* 本稿の主要部は、軽金属, 68-9 (2018), 513に掲載。

The main part of this paper has been published in the Journal of The Japan Institute of Light Metal, 68-9 (2018), 513.

** (株)UACJ R&Dセンター 第四開発部 博士 (工学)

No.4 Development Department, Research & Development Division, UACJ Corporation, Ph.D.

な仏教国), 料理のスタイルなど, 違いを挙げればきりが無い。日本人は仕事のし過ぎだとはよく聞かすが, 逆にタイ人はオン/オフの切替がしっかりしており, 定時過ぎて周囲を見渡すと残るのは日本人ばかり, という状況に苦笑いしたことが懐かしい。アドバイザーという立場で赴任したが, 日本風の考え方をただ押し付けるのはよくなく, 現地の文化になじむようにうまく橋渡しすることが赴任者の役割であると感じた。

教育という観点で言えば, 教科書などの教育ソースが不足しているように感じた。タイ人エンジニアの話では, 大学の理数系科目はほぼ英語の教科書をベースに, 英語あるいはタイ語で講義が行われているようである。そのため, 英会話の能力については日本人と比較しても優れており, 日常会話には支障ないレベルと言える。一方で, 日本と比べると街中に書店が少なく, 学術的な専門書については(もちろん探せばあると思われるが)小職が行動する範囲内においては見かけなかった。タイ語で書かれた専門書がもっと普及してほしいと感じた(外国語で書かれた教科書が読みにくいのは小

職だけではないと思う)。街中にそういった専門書が見受けられない分, 教育には飢えているように感じた。例えば, 課内で週に1度勉強会を開催していたが, タイ人エンジニアは積極的に参加して知識を吸収しようとする姿勢が強く見受けられた。

タイは微笑みの国と言われるが, 個人的にはまさにその通りだと思った。彼らは人懐っこく, 先輩から後輩への指導も非常に面倒見が良く感じた。ラヨン製造所はまだ設立から5年の若い会社であるが, UACJグループの主力工場としての期待が非常に大きい。一人の材料技術者としても今後もラヨン製造所を通し, タイの発展に貢献していきたい。



山本 大 (Dai Yamamoto)
(株)UACJ R&Dセンター 第四開発部 博士(工学)